

市民病院だより

近年増加している子宮体がん

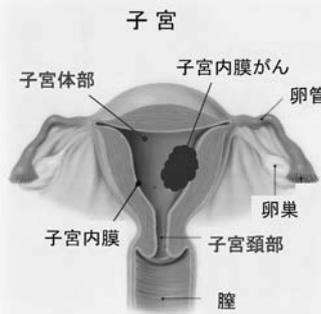
産婦人科医師 松尾 憲人
一昨年に「子宮頸がん」の主な原因はヒトパピローマウイルスで、予防ワクチンが有効であることをお話しました。平成22年に小城市が全国に率先して中学生を対象に予防ワクチンの公費補助を始め、今では全国の市町村に広く普及されています。

子宮体がんとは

今回は、年々増加傾向にある「子宮体がん」についてお話します。
以前は、子宮がんといえば子宮頸がんのことを総称していましたが、現在では、子宮体がんが子宮がんの40%以上を占めるようになりました。

下図のように、子宮体部は胎児を育てる鶏卵大の臓器です。

主に、この内側にある子宮内膜から発生する疾患であり、「子宮内膜がん」とも呼ばれます。



子宮内膜がんは、ほとんどの場合、前がん状態(がんになりやすい状態)である子宮内膜増殖症を経てがんになります。仮に増殖症となっても、規則しく月経が認められる女性は子宮内膜がんに進展しにくいと言えます。よって、閉経前後以降の女性が大多数を占めます。

症状

子宮頸がんと同様に、初期症

状は不正出血です。新鮮な赤色出血はもちろん、閉経後に見られる褐色のおりものも出血の可能性が高いとと思ってください。進行しないと、腹痛など他の症状はまずありません。

どんな人に多いのか

子宮内膜がんは、閉経後で、未婚や少子、月経不順の方、生活習慣病(肥満、糖尿病、高血圧など)の方、また乳がんの術後にホルモン治療(タモキシフェン)を受けられている方も高リスクとなります。

このような高リスク因子に当てはまる方が多くなったため、子宮内膜がんも増加傾向にあるのです。

検査

子宮内からの出血の有無が重要な所見ですが、初めに超音波検査で子宮内膜の肥厚所見がなければ確認します。ブラシで採取する子宮内膜細胞診や組織診が診断に有効ですが、頸がんの検

査と比較し若干の痛みを伴います。このような理由もあり、集団検診ではあまり行われていません。



▲子宮内膜がんのMRI検査、子宮内膜が肥厚しています

治療

万が一、子宮内膜がんの診断となった場合は子宮摘出術が施行されます。しかし、ごく初期の方で強く妊娠機能の温存を希望される方は、子宮温存手術とホルモン療法が行われる場合もあります。

子宮体がんはがんの中では、治りやすい部類に入ります。閉経期以降の女性で、褐色のおりものなど少しでも不正出血が疑われる方や症状がなくても高リスクの方は検査を受けてください。

時間外受診をされる方へ 急病などでの時間外受診の場合は、必ず電話で宿日直医師の担当診療科をお問合せください。専門外の疾病の場合は、診察できませんのでご了承ください。
【問合せ】小城市民病院 ☎ 73 - 2161 ホームページ・アドレス <http://www.city.ogi.lg.jp/hospital/>